



# 遥けき国 ミャンマー

せきばクリニック院長 関場 慶博

ミャンマーは英国の植民地時代には国名がビルマ、首都はラングーンで東南アジア随一の繁栄を誇る国際都市だった。1989年に当時の軍事政権は国名をミャンマーへ変更し、ラングーンもヤンゴンと名称が変えられ、ネーピードーという政治的首都が新しく作られた。国土の面積は日本の約1.8倍、人口は約5、800万人で、国民の90%が仏教徒である。

2024年2月10日、真っ赤なブーゲンビリアが咲くヤンゴンの日本人墓地に今年も私はやってきた。初めてこの地を訪れたのは2015年、それ以来、毎年この地を訪れてきた。父の魂とともに。

第二次世界大戦中、ミャンマーでは日英の壮絶な戦いがあり、特にインパール作戦で多くの日本兵が亡くなった。邦人のミャンマーでの戦没者数は13万7千人とも言われている。私の父は、2年間に渡り日本軍の軍医として兵役につ

いていた。父は幸いにも生き延びて、戦後日本へと帰ってくる事ができた。父が過酷な状況の中にあつても生き延びることができたのは、ミャンマーの人々のおかげだったと、よく聞かされていた。英軍に追われて敗走する日本軍はほぼ壊滅状態。その中で、ミャンマーの村人が匿ってくれて九死に一生を得たと。父は、いつかは多くの戦友が眠るミャンマーの地を訪れて彼らの霊を弔いたい、そして命を救ってくれたミャンマーの人たちにお礼が言いたい、と生前に私に語っていた。しかしながら、その思いを果たせず父は69歳でこの世を去った。父の思いを遺言とし、息子の私が代わりにミャンマーを訪れることにしたのだ。

ヤンゴン郊外の空港の近くに日本人墓地はある。そこには日本政府が建てた慰霊塔、遺族や生き延びた戦友たちが建てたお墓がある。「友よ安らかに眠れ」世界が平和で

ありますように」と墓碑には書かれてある。この日本人墓地を現地の人が守ってくれている。ありがたいことだ。私たち日本人が墓参りに行くと、線香と名前を書く記帳ノート

を渡してくれる。記帳ノートには父と私の名前をいつも書く。「お父さん、今年も一緒にお父さんの戦友たちの墓参りに来ましたよ」

